

資

料

## 『日本発の「世界」思想』～和〈やわらぎ〉の外交に向けて

—— 京都産業大学で学んだ11年 ——

2020年1月15日

世界問題研究所長 東郷和彦<sup>(1)</sup>

### はじめに

ご紹介ありがとうございます。

みなさんこんにちは。ご紹介にあずかりました東郷和彦でございます。

法学部の芦立先生、大変ご懇篤なご紹介ありがとうございました。

ここにお集まりくださった、法学部の先生、世界問題研究所の先生、今日はお忙しいところをお集まりくださり本当にありがとうございました。それから学生の皆さん、ちらほらと私の知っている学生の皆さんもいますが、大部分の方は芦立先生のクラスをはじめとしてここで初めてお目にかかる方だと思います。今日何らかの御縁で一時間半皆さんと一緒に時間を過ごすことができます。大変うれしく思っております。なにか私の11年の京都産業大学での時間を総括したようなお話をしたいと思いますので、しばらくの間よろしく願います。

今日いったい何の話をしたらよいかと思いました。やはり京都産業大学

---

(1) この講演記録は、2020年1月15日に京都産業大学で行われた筆者の最終講義について、講演のあとに、内容面及び修辞面での若干の訂正を加えてとりまとめたものである。本講義の機会を作ってくださった植村和秀法学部長(当時)、芦立秀朗法学部教授ほか関係者の方に心からの感謝を申し上げます。

に11年いましたので、その11年の勉強の結果ただいま現在私が、これが自分が勉強してきた一番大事なことだな、と思うことを率直にお話ししたい。それをご説明するために、一枚紙をつくってきました。まずはそれを御覧ください（末尾参照）。

さてこの標題に「『日本発の「世界」思想』～和〈やわらぎ〉の外交に向けて」と書いてあります。これが今日お話ししたい一番大事なテーマです。なぜなら、私はここで11年、そのうち10年間世界問題研究所の所長の仕事をしてきたのですが、そのうち5年をかけてこの本ですね、この『日本発の「世界」思想』という本を研究所の仲間と一緒に、それから他の先生と一緒につくりました。

この本は、私とそちらに座っておられる哲学の森先生、それからこちらにおられる法学部の中谷先生、この三人が編者となりまして、『日本発の「世界」思想』は何かということを考えました。その中の外交部分の結論として、外交で一番大事なことは「和〈やわらぎ〉の外交」ではないかという結論になりました。そこで、今日は、そのことをお話ししたいと思います。

ただ、この本の話だけではなくて、この11年が全体として私の人生にどういう意味があったかということをお話ししたいので、副題として、「——京都産業大学で学んだ11年——」とつけたわけです。

そのお話の目安としてお手元の一枚紙を作ってきましたので、この紙にそってお話ししたいと思います。四つに分かれています。

一番目は京産大に来る前の短いイントロのような話です。

二番目に京産大に来てからこの「和〈やわらぎ〉の外交」が誕生するまでの経緯です。

三番目が、この講義の中心で、やわらぎの外交を、具体的にいま起きている世界情勢に当てはめて考えてみると大変むずかしいことがある。いま国際会議などでみんな言っている話は、中国とアメリカの対立関係です。なので、米中対立の中で、このやわらぎの外交というものをどう考えたらよいか。日本として、あるいは、世界の中でどう考えたらよいか。

最後に、四番目として若干の結語を申し上げたいと思います。

## 京都産業大学以前

### 外務省時代

さてこの大学に来るまでということですが、さきほど芦立先生からのご紹介にもありましたように、私の人生の前半は外務省というところで仕事をしていました。外務省というところは、入った時に、「君はこの言葉を勉強しろ」と言うわけです。私は「ロシア語を勉強しろ」と言われて、これが私の人生の大きな流れを決めました。

1968年外務省に入り、34年仕事をしました。その34年のうちのちょうど半分をソ連・ロシアとの関係で仕事をしまして、それ以外の部分は、国際法とか、国際経済とか、あるいは先進国との関係とかの仕事をしてきました。ソ連・ロシアのスペシャリストとして仕事をし、そのほかの分野のジェネラリストとして仕事をし、大変いいバランスで仕事をする幸運にめぐまれました。

ロシアとの関係では、2001年の3月、ちょうど今のプーチン氏が大統領になったばかり、こちらは森総理との間でイルクーツクでの首脳会談が行われました。それまでの北方領土交渉の中でも非常に大きな成果があったのではなかったのかと思っているのですが、その後、北方領土交渉と日本の国内政治がごたごたになりまして、2002年に私の同期の人たちとくらべると7年早く外務省を退官しました。

### 外国の大学で

その時は、最近はやっている言葉では「想定外」の事態がおきまして、「どうすればよいか」と思っていたときに、非常に幸いだったのは、イルクーツクの首脳会談が終わってからオランダの大使をしまして、オランダの人たちが8か月しか大使をしなかったことについて非常にびっくりして、「もし日本でやることがなかったらオランダに帰っていらっしやい」ということで、これは大変ありがたく承りまして、退官してからすぐオランダに戻りました。オランダの友人たちは、ライデン大学に1年間ポスト

を作ってくれ、条件は一冊本を書くことで、そこから私の本を書く、それから、講義をする、この両者を組み合わせた学問の生活が始まったわけがあります。

これが始まった2002年からちょうど7年たった2009年に京都産業大学に迎えていただきました。この7年の間に若干の経験をしました。この間に学んだことを三点、お話ししたいと思います。

一番目に、国際関係論。本を書けと言われたわけですが、では何について書くか。外交についての本を書こうと思いました。日本外交全体の勉強も若干してきたので、そういうことについて書き始めました。しかし、学者として本を書くには、やはり、理論というものを考えないといけない。外交官としてやっている時は、とにかく結果第一ですから、書くものはなるべく短く。まあ一枚紙くらいにまとめることが肝要だったのですが、学者として書く時には、先行研究をしっかり調べる、それからある程度の理論でそれを書く。

理論としてなにがあるかなと思ったときに、やはり国際関係論という分野が一番近いのではないかと思いました。ライデン大学にいる間にいろんな先生に教えてもらいながら、国際関係論の勉強をやりなおしました。

そこで一つ鮮明な印象をもっていることがあります。大学時代にも国際関係論を若干勉強したのですが、その時の国際関係論の三本柱というのは、リアリズム（力が世界を仕切る）、リベラリズム（価値が世界をリードする、価値といっても西欧的な民主主義とか、人権とか、法の支配とか）、三番目はマルクシズムでありました。

ところが私が外務省で仕事をしている間に、ソ連邦が崩壊してしまった。それから中国も経済は資本主義ということになった、そこでマルクシズムは影を潜め、その代わりに、コンストラクティヴィズム（構築主義<sup>(2)</sup>）とい

---

(2) 「構成主義」と訳されることも頻繁にあるが、筆者は、語感上「構築主義」の方を使うことが多い。

うそれまで私が全く聞いたことのなかった理論が1992年、冷戦が終わった直後から国際関係論の三番目の柱になっていたのです。私は、この「構築主義」とはなんなのかということが最初よく解らなかったのですが、結局それぞれの国家がものを決める時に、その国自身の歴史、それから文化、その国が自分自身が大事と考えているアイデンティティ、そういうそれぞれの国家が「構築」していくものがとても重要である、だいたいそういうことなのかと理解しました。

これは非常に深い印象をうけましたし、ある意味で私の考えにピタッとあった考えでした。アレクサンダー・ウェント、という人が構築主義の中心にいたのですが、この人の言葉に大変深い印象をもちました。

二番目に、中国とアジア。当時ライデンでアジアというと一に中国、二に中国、三に中国、四と五がなくて、六ぐらいに韓国、インド。日本は出てこない。これは、たまったものではありません。しかし、それだけ、中国の台頭 rise of China、主に経済を中心とする中国の台頭が印象的だったのですね。

私は外務省でロシアについて大変時間をとった結果、アジアについて、勤務したこともないし、本省でアジア関係の部局で直接仕事をしたこともない。そこにぽこっと大きな穴が開いていました。

中国を始めとするアジアについて勉強しないと、元外交官としては話にならない。これからは、中国・アジアの勉強をしていきたいという気持ちをもって、ライデン大学で2年勉強した後に、アメリカのプリンストン大学に行きました。

そこでギルバート・ローズマンという先生に出会いました。この先生はアメリカ人で、日本語・ロシア語・中国語・韓国語の四つの言葉ができ、この四つの言葉を使って、北東アジアのアイデンティティ（自己認識）とストラテジイ（戦略）を研究している人でした。この先生に教えられて、アジア、北東アジアを勉強する機会をえました。私がロシアについてもっていた経験が、ローズマン先生の日ロ関係についての関心とかみあって、

大変楽しい時間を過ごすことができました。

プリンストンが終わったあとに今度はアジアに行きたいと思ひまして、それまでにできた伝手を頼って連絡をとり、最初に四か月台湾で、日本以外初めてのアジアとして生活しました。そのあと、韓国についてもソウルに滞在して4か月教える機会をもちました。それから外務省時代には一度も行ったことのない上海に何度も行くようになり、北京と合わせて中国を頻繁に訪問するようになり、というわけでアジア、特に北東アジアについての勉強をするようになったわけです。

三番目に、アイデンティティと文明。これまた中国の話に戻りますが、ライデンで中国に対する関心が圧倒的に高まっていたことを今お話ししました。では、中国のどの分野への関心でいっぱいになっていたかと言いますと、まず「経済」。経済の力が大きくなっていくことは当然「政治」の影響力も強くなっていく。その先に「軍事」の拡大が出てくる。経済・政治・軍事まではだいたい皆そう見ていたわけですが、私はその時、直感的にこれは必ず「文化」に来ると思ひました。

この点は先に述べたアイデンティティに関係しますが、新しい中国ができたときに、中国人の思想というものが必ず前面に出てくるにちがいない。中国の新しい思想、おそらくは新しい「中華思想」といったものが出てきたときに、一番の問題は、「その時日本は何を言うのか」ではないか。ただでさえ影が薄くなっていた日本が、新しい中国の思想に対し、日本としていうべき言葉がなかったら、世界の中で日本の底がまた二段、三段と抜けるのではないかと、という一種の恐怖心にとられるようになりました。

その後の勉強の中で、中国の台頭を見ながら、それに対する日本発のメッセージは何かということに勉強してゆきたいと思ひながら、やがて日本に帰るようになり、先ほどご紹介があったように2009年に京都産業大学に迎えていただいたわけです。

この間外国をぐるぐる回ってきて、だいたい一年ごとの契約か、場合によってはもっと短い期間で籍を変えてきたわけです。京都産業大学に迎え

『日本発の「世界」思想』～和〈やわらぎ〉の外交に向けて

ていただいた時の気持ちは、船があちらこちらに航海をしてきて、漸くいま「母港」に入れていただいたという気持ちでありました。

この間どうして7年間回ってこられたのか、それは人の縁です。皆どこかで誰かが、見えないところで助けてくださった。京都産業大学にこられたのも、外務省時代から作っていた人の縁によるわけで、本当にありがたいことだと感じております。

## 京都産業大学

### 最初は何を：北東アジアとアイデンティティ

さて、京産大という母港に迎えていただいて、私としては、私がそれまで人生の間で積み重ねてきたこと、それをできるだけ具体的な形で仕事の中に反映させて、その結果を、いずれ私は京産大を去るわけですから、私がいなくなった後も何らかの形でこの大学の役に立つような形で残していけないか、僭越ですが、そう思いました。

では私が何をここに残していけるだろうか。やはりそれまでやってきた経験を生かして何かをやって、それを残していく以外にはないと思いました。

では経験とはなにか。外務省時代に関して言えば、ロシア。それから、ロシア外交をやるにあたって必ず話をしなくてはいけなかったアメリカ。外務省をやめたあとは、少し遅れて勉強し始めた、中国、最初に住んだ台湾。韓国。もちろんその中心に日本がいるわけで、だいたいこの六つの国・地域の間で起きている安全保障の問題、歴史認識の問題、領土問題。

まあこの辺がそれまで私が親しんできた分野かなと。それ以外にも、オーストラリアとか、東南アジアとか、インドとか関心のひろがっている国もありましたが、何をどうするかという点については京産大に来た時にはっきりした線はもっていませんでした。

ただ、何をするにしても一番大事なのは、共同研究。ということは、なによりもまず、他の先生がどういう関心をもっておられるかを伺わなくて

はいけません。外国との関係では「俺はこれをやりたい」と言って人を呼んで会議をやるのは大変なのですね。ですから、自分で手をあげるよりは、まあ、「東郷さんが京産大に行ったのなら、何かやってみようや」という声が出てくるかもしれないので、それを見ながらやっていく。つまり、学内と学外の両方をみながら自然体でやっていく。ということでもいいのではないかと思っていました。

結果として、素晴らしい先達・同僚にめぐまれ、かつ、外国からも時々声がかかり、特に前半は、そういうものを動かしながらやっていきました。それでも具体的に何についてやったかという、さっき申し上げた構築主義で取り上げたアイデンティティですね。歴史・文化・文明という観点の中で自分の国にはどういう意味があるかという話が、共同研究の中心の話として流れていったと思います。

というわけで、先ほどご紹介した『日本発の「世界」思想』の本は、京産大に来てから上梓した6冊目の本なのですが、前半で出版した5冊の本はすべてそういうアイデンティティを中心に出版したのになりました。どういう本があったかは世界問題研究所のホームページにアップしてありますので、それを御覧ください。

### 『日本発の「世界」思想：哲学／公共／外交』

前半の作業が概ね軌道に乗ったところで、2012年、かねてから考えていた「中国が自分の新しい思想を打ち出したときに、では、日本としては何をいえばいいのか」というテーマを中心においた共同研究を始めました。本を出すことができたのはちょうどその5年後の2017年となりました。

この共同研究を始めるときに、三つの手がかかるのではないかと考えました。一つは「哲学」で、ここは森哲郎先生のご指導を仰ぎながら進める。次は「公共」で、中谷真憲先生のご指導を仰ぎながら進める。最後は「外交」で、私がこれまでやってきたことを踏まえてとりまとめる。この三つを、根としての「哲学」、幹としての「公共」、それから「枝」としての「外交」というふうに組み立てました。



ここで少し横に話をそらすのですが、哲学を根に据えてやりたいというのは、私にとって出発点でした。哲学の問題を根に持ってこずして、『日本発の「世界」思想』を考えることなどできないと思っていました。

これは私の大学時代に戻るのですが、さっき申し上げたように、国際関係論の勉強もしました。しかし、私の大学時代の「若き情熱」は哲学でした。東京大学の駒場でちょうど大学の一年の秋に、それほど深い考えはなかったのですが哲学の授業をとりました。そこに井上忠というギリシア哲学の先生がいて、そのクラスの最前列に座っていたら最初の授業に先生が入ってきて、もっているコートをおいて黒板に「何か？」と書いた。「哲学というのは、最後まで、徹底して、妥協することなく、問いかけることです」。何というか、ここでビビッときたわけです。他の先生と全然違った印象をうけました。知識を箱に入れて切り売りしているのではなく、自分の人生の中から、本当に大事なことは、最後まで、徹底して、妥協することなく問いかけることだと。そこで「おおっ」と思って、そこから段々と哲学に惹かれていきました。

結局卒業論文は、プラトンの対話編についての論文を書きました。それから自分で、教科書と、もちろん読める言葉には限界があったのですが、少しでも原書を読むということで、3年半、コツコツと哲学の勉強をしました。

けれども、縁あって外務省に入りました。気持ちとしては、外務省に入っても哲学の勉強はできるではないか。確かに気持ちとしてはそうでしたし、哲学をやったことによって、最後まで、徹底的に、妥協せずに問いかけるという点に関してはながしか身に着いたものがあつたように思います。外交の仕事をやっていくにあたって、最後まで、徹底して考えなくてはいけないという力は、多少いただいたように思います。

ですが、哲学そのものの勉強については、外務省に入って目の前の仕事、例えば北方領土の仕事がうわーっと忙しくなる、そうするとそれと直接関係のない仕事ができなくなってしまって、そうして40年近くたってしまった。これが私の人生の中で悔いがあるとすれば一番大きな悔いであり

ます。

そこで哲学を根に持った共同研究をしたかったのですが、私一人ではまったくできない。しかし、そこで森先生にお会いして、森先生のお話をうかがい、あーこれは、哲学を根に据えた「木」をグループとして造れるだろうと思ったわけです。

それからもう一つは、中谷先生が「公共」という私がまったく勉強したことのない学問をやっておられた。しかも、本を読んでものを考える学問、ある種の「象牙の塔」の中での公共論を解き放って、京都という素晴らしい、しかし非常に複雑な町の中に解き放って、新しい視点で公共 public について考えておられた。なにが公共かという点について、京都という具体的な場所の中で京都の人たちと一緒に考えていくという、事業としての研究をやっておられた。これは私の考えもしなかったことでした。

このお二人の研究を組み合わせるとなにか本にできるのではないかと考えて5年間、この三つの分野の先生に集まっていたいて、20人。京産大の先生11人、京産大以外の先生9人。それから日本人13人、外国人7人。ということで、2017年1月30日にこの本をだすことができました。

### 無からの包摂—十牛図

さて、森先生の前でこういうお話をするのは恥ずかしいのですが、哲学をどう組み立てていったらいいのかということで、森先生といろいろお話しして、まずはこれまでの日本の哲学が到達した最高のレベルとして、京都学派があるでしょうと。西田幾多郎先生。戦争が始まる前に日本の哲学が到達した一番のレベルで、ヨーロッパの哲学を極めてそれを日本に紹介するのではなくて、その中から、日本の哲学を作っていかれた。

それはだいたい私も理解していたと思うのですが、西田哲学、それから生涯の盟友であった鈴木大拙先生、このお二人を軸にして、西田哲学をもう一度基礎において考える。

私も森先生にいろいろ教えていただきながら、西田幾多郎の本を読み始めました。さて学生さんたちの中で、西田幾多郎の本を読まれた方おられ

『日本発の「世界」思想』～和〈やわらぎ〉の外交に向けて

ますか？ どんなものでいいですが、読んだことのある方ちょっと手をあげてくれますか？ 後ろの方で数名ですね。

そうではないかと思っていたのですが、読まれるとわかりますが、なかなか言葉が難しい。私も何度かトライしているのですが、終わりまできちっと掌握したというところになかなか到達しません。ですが西田幾多郎の研究を大雑把に言えば、前半の勉強と後半の勉強に分けて考えました。

前半の勉強を総大成したのが『善の研究』。これは1911年、西田先生が41歳の時に書かれたものです。ここに西田哲学の一番重要な概念を「純粹経験」という言葉でまとめておられる。「純粹経験」とはなにか？ 西田先生の言葉でいえば、「自己の意識状態を直下に経験した時、未だ主もなく客もない、知識とその対象とがまったく合一している。これが経験の最醇なる者である<sup>(3)</sup>」ということになります。

私が一番こういうことかなあと思ったのは、私が学生時代にいろいろ本を読んでいて、あるところまで一生懸命考えて読んでいくと、どこかでふっと言葉が消えるような印象を受けることがある。考えている自分と考えてきている対象との間で、ふっと言葉が消えるような印象を持つことが何回かあったように思います。研究している主体としての自分と、その対象である客体、この間の境がわからなくなるような一つの拠点というか、それが私にとっては一番解りやすいことかなあと思いました。

後半、彼はそれを「無の場所」という概念に深めます。「場所の哲学」としての後期西田哲学が論文として登場したのは「純粹経験」から15年、『働くものから見るものへ』という書籍として公開されたのがその翌年の1927年で、「主客合一とか主もなく客もないと云ふことは、唯、場所が真の無となると云ふことでなければならぬ」と表現されるにいたり<sup>(4)</sup>ます。

ここからまた「絶対無」というような難しい概念が出てきます。その難しさの中で呻吟していた時に、西田先生が、鈴木大拙先生とともに若いころ

(3) 西田幾多郎「善の研究」講談社学術文庫、2006年、30ページ。

(4) オギュスタン・ベルク、川勝平太『ベルク「風土学」とは何か』藤原書店、2019年、124ページ。

から徹底的に座禅をされたということを森先生から教えていただきました。

私も3年半大学時代に哲学を勉強していた時に禅に興味を持ちまして、2年間、家のすぐそばに曹洞宗のお寺があったので、そこで禅をやりました。総本山が永平寺で、ここにも二回ほど短い期間ですが参禅しに行ったことがありました。でも特に曹洞宗は「只管打座」といって言葉を使わない、とにかく座る。自分はいま座禅を再開しているわけではないので、座らずして座禅について何かを語るの、誠に、忸怩たるものがあります。

ただ森先生からお話をうかがっていて、臨済宗は「公案」をもって言葉のある程度は使う。その中で、森先生から十牛図の話がうかがいました。十牛図の話は、座禅をしなければ本当のところはわからないとは思いますが、イメージとしては強い衝撃を受けました。今日お話をするにあたって、十牛図だけは実際に見ていただかないと何の話をしているかわかりませんが、幸いネットにたくさん出ていますので、皆さん、スマホで見たいと思います。

一番「牛を尋ねる」から順番に並んでいます。青年、これは皆様自身だと思っていただいて良いと思います。真理を求める。哲学的根拠を求めているといってもよいと思います。牛はたぶん「真理」そのものと言ってもよいと思います。

二番で「牛の跡」を見るわけです。三番で実際に「牛を見て」、四番で自分との関係である程度「牛を得る」。五番で「牛を飼いならして」、六番見てください、「牛の上に乗って」いるではないですか。意気揚々と「真理を捕まえた」。ここまで、一番から六番までは修養の過程です。

ところが、本当に面白いと思ったのは、七番ですね。牛を引き連れて自分の家に帰った時に、「牛を忘れる」。つまり、真理を捕まえたと思って真理の上に乗って意気揚々と帰ってきた人が、家に戻った時にふっと牛を忘れる瞬間がでてくる。真理を求めた人が、真理を忘れる、一体何が起きたのだろう。ところが、もっと面白いのは、その隣の八番。何もないのです。「人も牛も忘れる」。

今の時点での私の理解をいうと、西田の言った「純粹経験」はたぶん七

『日本発の「世界」思想』～和〈やわらぎ〉の外交に向けて

番。「ふっと言葉が消える」。しかし後半生において西田が考えていたのは、「無の場所」ですね。場所そのものがなくなってしまう。というのがこの八番。

しかも更に興味深いのはここで終わらない。その次に九番。「返本還元」です。つまり自然がもう一回自分の前に現れる。その現れた自然を踏まえて、十番、もう一回「真理」を人に語り始める。ここでぐるっと回る。何かすばらしいなと思ったわけでありませう。

### 和〈やわらぎ〉の外交の誕生

さてそれを踏まえて「やわらぎの外交」ですね。この「無からの包摂」を踏まえて世界を見たときに、二番目は「公共」ですから言わば国内政治。まあ十牛図の最後の十番のおじいちゃんを見てください。「無」というある種の哲学的体験を踏まえてから、世界を見たときに何が見えるか。

それは同じ日本人ですから、その時に「自分の意見でなくてはだめだ」と言って一方的に決めるのではなくて、相手との間にある種の距離において、その距離の中でものごとの処理をする。たぶんこの距離感をもって「間〈あわい〉」とすることが言えるのではないか。

しかし、外国との関係では必ずしもそうはいかないのですね。まったく違った歴史・文化・アイデンティティをもった人たちと、場合によっては戦争しなくてはいけなくなる、そういう緊張関係があるわけで、そこである程度は、こちらは主張しなくてはいけない。主張したその仕方、そしてその主張している場を自覚したときに、すべてが、ふっと軽くなるような視点が世界の中にあるかもしれない。それをもって「和〈やわらぎ〉の外交」ということができるのではないか。

この本の結論部分にあたる最終章は中谷先生が書いておられます。その「和〈やわらぎ〉の外交」の誕生の部分、読ませていただきます。皆さん、ご清聴をお願いします。<sup>(5)</sup>

---

(5) 中谷真憲「終章 無〈む〉、間〈あわい〉、和〈やわらぎ〉——日本の思想の問いかけるメ

冷徹なりアリズムは外交にとって極めて重要であり、十全な安全保障環境の構築は、軍事戦略面を重視つつ、現実的かつ緻密に進めていかねばならない。

私たちはひとまず、こうした対立の激化とは、ロゴス（言説）そのものに由来し、やがて感情に飛び火する構造的なものと押さえておいた方がよいだろう。

そう認識しておくことで、私たちはつねに「正しさ」が解決なのではない、ということを実感しておくことができる。

外交は、力対力、ロゴス対ロゴスに尽きるものではない。戦略的優位を目指し、国際的な討議の場においては、国家としての主張を冷静に展開すること。これはむしろ、徹底して必要である。しかしその底には、相手を完膚なきまでに叩きのめし屈服せしめるような対立の思想はなく、正しさがぶつかりあう悲しさを自覚し、自他を包摂していく場をつくりだすような〈やわらぎ〉の思想がいるのではないか。

ということで、「やわらぎの外交」の誕生であります。

## やわらぎの外交序説

さて、ここから後半に移ります。これからが今日のお話の中心たるべきですが、この「やわらぎの外交」を今の世界の中に適用したときに、一体何が言えるのか。しかし冒頭にお話ししたように、いま世界情勢は激変しています。

この本を出したのは、2017年1月30日です。それから3年たちました。3年たって世界は、いま私たちがここで申し上げているような、相手を認め合うというような意味でのやわらぎの世界に近づいているか。まったく

---

↘ もの、東郷・森・中谷編著『日本発の「世界」思想』（藤原書店、2017年）360, 370 ページ。

正反対のところに来ているように思います。

なんで正反対のところに来ているのかということで、アメリカと中国が正面からぶつかって、従来私たちが国際関係論の中で理解してきた地政学的な対立だけではなくて、第四次産業革命と2016年から言われているデジタルによる世界の分割が起きています。この二つが重なって、正直いったいどういう米中関係になっているかよくわからないところに追い込まれています。ではその中で「やわらぎ」をどういう風に考えていくか。本当に難しいという状況に追い詰められているように思うのですね。

米中関係を考える時間軸として、二つ提起します。一つは、冷戦の終了（1989年としましょう）から現代までという軸です。もう一つは、第三次産業革命（コンピューター革命、1980年ごろ）と第四次産業革命（デジタル革命、2016年ごろ）という軸です。

## 世界情勢の激変 米中対決

### 現状維持国としての米国

そこでアメリカですが、アメリカの動きは割と単純なのではないかと思うのです。鍵になる年は、とにかく1989年です。近現代史がきちんと頭に入っていない学生さんがおられたら、1989年だけはきちっと頭に入れてほしい。なぜかというこの年に冷戦が終わったからです。

日本にとってはここは非常にわかりやすい。これは、昭和が終わって平成になった年ですね。従って、ここでお話しする大部分は平成時代が、日本と世界にとってどういう意味があったのかということに尽きるということになります。

さて、1989年アメリカの独り勝ちです。そのあとアメリカは調子が狂うような出来事が二回起きました。最初が2001年9月11日、同時多発テロが外からの衝撃としてやって来た。アメリカの中枢部がイスラムからまさに侵略された。二番目の衝撃は、2007年のサブ・プライム住宅ローン

危機から 2008 年のリーマン危機。この内外の衝撃でアメリカの調子が悪くなってきた。その後がオバマの時代になってくるというのが、アメリカの大きな流れです。

### 台頭する現状変更国としての中国

中国の流れはもう少し複雑ですね。しかし、出発点は、同じ 1989 年。しかし中国にとっての 1989 年は何か。天安門事件です。天安門事件というのは、私が中国人だったら本当に胸に痛い。語りたくても語れない。しかし語らねばならない。本当に難しい事件だと思います。

結局、鄧小平という中国の改革の旗手。大変な実力者であり、立派な人だと思います、その人の命令によって、北京に集まった中国の一番優秀な学生たちに対して、自分たちの軍隊が発砲せざるを得なかった。本当に言葉がありません。1989 年に冷戦の勝利者となったと思っているアメリカ・日本と、天安門事件によって 1989 年を始めた中国と、全く出発点が違うということは理解しなくてははいけないと思います。

それで中国人も、しばらくどうしてよいかわからなかった。しかし徐々に立ち直ってくるわけです。最初の立ち直りは、1992 年、鄧小平の南巡講話です。どうしてよいかわからなくなった中国人に対して、「いやっ、これでいいんだ。改革開放経済は引き続きやっていく。しかし、共産党の権力だけは絶対に離さない」ということで今の中国の骨格ができた。

その時に「韜光養晦」という対米政策がでてくる。私は中国語ができないので、正確なニュアンスはわからないのですが、「これからも、一生懸命努力をして力をつける。しかし頭を下げながらやる。本当に力がつくまでは自分たちのもっている力を正面から出すことはしない」ということだと理解しています。

これが、江沢民・胡錦濤時代に引き継がれ、この間、中国はどんどん強く大きくなっていく。その間「韜光養晦」をいつやめるか皆注目していた。いまの世界の定説はたぶん、これは習近平が出てくる前、アメリカが国内的にも弱ってきた機会をとらえて、2008 年にやめたのではないかという



ことではないかと理解しています。

しかし、いわゆる「主張する中国」を最も明確に出してきたのは言うまでもなく習近平時代に入ってからで、2012年の第18回の党大会で習近平が党主席に選出され、その際「中華民族の偉大なる復興」というおそらく中国人なら一番言いたいことをはっきり言った。その第一期政権の間に、13年に「一帯一路」政策をうちだし、15年に「中国製造2025」政策を打ち出した。

2017年にいよいよ第二期政権が始まり、「富強・民主・文明・和諧・美麗の社会主義現代化強国」という、覚えきれないような国家目標を出した。私は、この国家目標はなかなか面白いと思うのですが、「富強」はまさに力をつけるためのリアリズムですね、「民主」は西側のリベラリズムと少し共鳴するところがあるのではないかと思います。ところが、そのあとの「文明・和諧・美麗」というのは、コンストラクティズムでいうところの伝統・文化・文明という要因と共鳴するところがあるのではないか。

しかし17年の党大会演説全体を読んでもみると、メッセージは一つだと思えます。2049年、中華人民共和国ができた1949年からちょうど100年後の2049年までに、自分たちはアメリカに比肩する或いはアメリカを追い越す世界の完全な一等国になるというメッセージのように見えます。それを、実現するためのあらゆるメカニズムを整えてきたし、これからも更にそのメカニズムを強化するというので、2018年の全人代で彼は終身の国家主席になった。そこで、中国の国家目標と習近平の目標が一致したという新事態に入ったということのように見えます。

### 地政学とデジタル革命下での覇権

ところでこの2017年ですが、米中関係にとっても世界にとっても重要な契機が更に二つあります。

まず冒頭で言った2016年の第四次産業革命、いわゆる「デジタル革命」が始まったばかりということです。これはもう学生さんたちの方が私よりも理解を深めていると思います。

このところ卒業生を含めて何人かの学生たちと話をしているのですが、デジタルの世界で何が起きているのか、正直言って私の世代では、いくら勉強しても、なかなか追いつかない。デジタル、つまり電気を通じる通信の容量がけた違いに大きくなってきている。そのデジタルの世界の中で今までと比べて考えられないようなたくさんの方が起きていると理解しています。

5G という大容量通信が出てきて、5G を含む Big Data をどういう風に管理するか、そこに AI (Artificial Intelligence) がどのような役割を果たすか、具体的には、ロボットとか、ドローンとか、今までと全く違った世界が生まれてきている。

特に考えておかななくてはいけないのは、これがサイバーを使った戦争にもものすごく大きな影響を与えるようになってきた。今までは鉄砲を打つ、大砲を打つ、ミサイルを打つ、その目に見える操作をコンピューターでやる、という風に技術は発展してきた。ところが、デジタルの世界が長足の進歩をしたおかげで、コンピューターのメカニズムを一つ変えるだけで、ある方向に向かって打ったと思った弾丸が真逆の方向に向かって飛んでいくという事態が、現実起きるようになった。これは戦争の概念を全く変えつつある。

こういう世界の中で、どこに行っても、Mutual Decoupling ということが言われるようになった。アメリカの GAF A (Google, Apple, Facebook, Amazon) 対中国の BATH (Baidu, Alibaba, Tencent, Huawei) というそれぞれ四つのデジタルの世界を仕切っているプラット・フォーマーが、お互いの世界を分けて仕切り始めている。

そういうまったく新しい対立の場所が登場したのと同時に、二番目の国際政治のベクトルを全面的に変えかねない新しい契機が登場しました。それが、2017 年初めからアメリカでトランプ大統領が登場したということだと思います。

トランプの登場と彼の「アメリカ第一」という最重要の政治目標は、冷戦終了後の世界政治の激動の下で、ナショナリズムとポピュリズムが台頭

し、すべての国が何らかの意味で「自国第一」に押し流されてきたことの、いわば、総決算のように見えます。しかし、これまで、アメリカベースで「世界政治に責任を持つ（自分の価値に応じてやる）」としてきたアメリカが、「自国第一」と開き直ったことの意味は、これからずしんと重いものがあると思います。

そこでこの3年間、アメリカの内外政治は、①トランプ個人によるアメリカの利益の測り方、②それを実現するための取引手法、③その予測不可能性等によって大混乱しています。

ところが大変興味深いのは、その混乱とは裏腹に、米国政府全体の中国に対する一致した強烈な警戒感が、トランプを含めつつも、むしろペンス副大統領によって集約される一連の対中強硬策に結実しているように見えることです。

端的には、2018年の10月4日に、ペンス副大統領がハドソン研究所で演説をします。政権掌握から2年たっています。このペンス副大統領の演説が今のアメリカの政策を考えるうえで最も重要な演説になります。ネットで訳文が簡単に読めますので学生の皆さんもこれだけは是非読んでほしいと思います。

結局、①今までのアメリカの政策は全部失敗した。②今までアメリカは中国を関与させることによって、中国はいずれアメリカと共通の価値を持つ国になっていくと思っていた。③しかしこの政策は全部失敗して、中国は独自の道を行くようになった。④独自の道をいだけなら良いとしても、中国のやりかたは、アメリカ自身の価値を内部から壊す方向に動き始めた。⑤これは絶対に許せない。従ってアメリカは絶対に中国に勝つ。しかもデジタルの世界を含めてすべて勝つ、という強烈な演説で、ここに、今の米中対立の骨格ができていると思います。

## 米中対立下での日本

### 安倍外交の対応

それでは日本がこれにどう対応しているかですが、一言で言って、なかなかよくやっているように思います。安倍総理が戻ってきたのは、2012年の末です。それから7年間外交をやってきました。

中国との関係でまず言うておかななくてはならないのは、彼が総理大臣になる直前にいわゆる尖閣の国有化という問題があり、中国の国境警備の船が尖閣の領海の中に入りたいときに入りたい数だけ入ってくるという状況が起きました。これは戦後の日中関係では最悪です。ですから当然「抑止」、そして「抑止」の中から徐々に対話を生み出す。安倍総理はこの段取りを、教科書のようにうまくやられた。

抑止政策を明確にすすめながら、2014年の「四点合意」によって「尖閣と靖国」についての現状維持をお互いの立場を傷つけないようにしながら合意し、最初の安倍・習近平会談を開始。更に「対話」を大きく進める契機になったのは、2017年の「一带一路」に対する日本側の政策転換でした。それまでは、「一带一路」は警戒視して脇で見る。ここから、協調して、できることは一緒にやりましょうという風に政策を変えた。

これが、習近平とアメリカとの対立がいつぱんに大きくなった時期に合ったこともあって、日中の対話のリズムはどんどんよくなっていき、2018年の李克強訪日と安倍訪中、2019年の習近平 G20での訪日、そして2020年春に予定する習近平訪日（注：コロナウイルスで延期）へと繋がっていったわけです。

ではアメリカですが、今回総理大臣に戻られて一番最初にやられたのは憲法9条の解釈改正ですね。しかしなぜそれをやっておかなければならなかったかという、それは、1960年の新安保条約の5条によって、日本が第三国から攻撃されたときにアメリカは日本を守る義務がある。アメリカの大統領はもし日本が攻撃されたら条約上米軍将兵に対し「あなたは日本を守るために、命を懸けて戦え」という命令をだす義務があります。

## 『日本発の「世界」思想』～和〈やわらぎ〉の外交に向けて

では日本はどうかといえば、憲法9条の解釈によってアメリカが攻撃されたときにこれを助けることは禁止されている。1960年以來日本はずっとこの「非対称」の矛盾を抱えてきており、どこかでこれは是正されねばならなかった。私は外務省ですっとそのことを思っていました。それができないでいたものを、安倍内閣は、2014-15-16年と三年かけて、範囲限定ではありますが、アメリカを守るために自衛隊を出動できる体制を整えた。アメリカに「あなたは一方的にアメリカに守られているだけではないですか」と言われたときに「いやそんなことはありません。限定的ではあるが一緒に戦うこともあるのですよ」と言えるようになった。この努力と政策変更は大変なことだったと思います。

その反映として、例えばイランですが、日本とアメリカはイランに対する政策はちがっています。しかし日本はアメリカに対して「同盟国はアメリカ」「友好国はイラン」と言って様々な手を打っている。それらの手は、ことごとくうまく当たっているように思います。

中国との関係でも記者会見で見る限り、いま、大変難しい香港の問題とか、ウイグルの問題とか、そういう問題を平和的に解決すべきだということ言うところまで来ている。少なくとも、記者会見でそういう発表をするのは、まさに、「やわらぎの外交」を実践しているからなのではないでしょうか。

他方、いま現出しつつある mutual decoupling の中で日本はどこに進むべきか。これは率直に言ってよくわかりません。アメリカの GAF A の世界だけに入って、Huawei のもっている基地局の能力をきれるのか。この部分については、日本外交はまだまだ検討中ではないかと感ぜられ、私も勉強中であると申し上げておきたいと思います。

## 米国における対中理解派（エズラ・ボーゲルとの対話等）

アメリカにおける議論は、共和党・民主党のリーダーシップを含めて「徹底的に中国とは妥協せず」という意見が主流なわけですが、アメリカ

の中には「ちょっと待てよ。そこまで中国を挑発して叩くのが、アメリカの利益になるのか」という声が、弱いのですが、出始めています。

最もよく知られているのが、2019年7月2日のワシントン・ポストに載った“China is not our enemy”「中国は私たちの敵ではない」という意見広告です。100人くらいのアメリカのインテリの人たちが署名して、「確かに中国にはおかしい点はあるけれども、中国を敵として扱えば向こうもこちらを敵として扱う。それはどこかまちがっているのではないか」と主張しています。

ここに、やわらぎの外交で私たちが言おうとしたことを言った人たちがいるように見えます。マイケル・スウェインという有名な中国学者や、エズラ・ボーゲル他が発起人として署名しています。私がこれまでお付き合いしてきた10人ほどの大変立派な方々もそこに名前を連ねています。

エズラ・ボーゲル、ハーバード大学名誉教授とはいろいろなところでこれまでお付き合いがありました。ボーゲル教授は、昨年2019年11月17日、今般彼が日中関係について書いた本のお披露目で日本に来た際に、半日時間をさいて、京都産業大学に来てくれました。私の方からは、『日本発の「世界」思想』から「やわらぎの外交」にいたるいろいろな話をしました。ボーゲル教授は、

中国とアメリカとの間に立って日本がメッセージを出すということはとても大切だ。

と述べられ、どういう風にそのメッセージを出したらよいかについては、

同じ批判をするにも、言い方の問題がある。これは口先だけの問題ではない。相手には相手の立場があることを理解したうえで、相手に受け入れられる部分は何かということを考えて発言したら良い。

日本も自らの過去について、いろいろ考えることがあるでしょう。アメリカ側にも考えることがある。そういうことをお互いに考えながら

『日本発の「世界」思想』～和〈やわらぎ〉の外交に向けて

発言することがいかに重要かと考えるアメリカ人があまりにも少ない。

ということを言っていました。

またその時に私の悩みだった「やわらぎ」を英語にしたらどうなるかについて、「“harmonization”か」と聞いたら、しばらく考えられて「いや harmonization ではない。“moderation”ではないか」と。

つまり、「立場が違っている時に、必ずしも『調和』になるかどうかはわからない。しかし、こちらの立場についての発言を柔らかくすることはできる。そういう意味で、これは moderation だろう」ということで、これは、大変参考になる示唆でした。

また、私が最近読んだユダヤの思想家のユヴァル・ハラリという人の発言の中にもこの moderation に通ずるものがあるのではないかと思いますし、彼が一番最近書いた『21 のレッスン』の最後の 21 番目のレッスンが「瞑想」という禅に非常に近いものでしめくられていたことも、大変興味深いところでした。

## 日本における「やわらぎの思想」への回帰

最後に今日本の国内で起きていることを申し上げますと、ちょうど昨年 2019 年 11 月 16 日に、比較文明学会の大会が行われそのテーマがなんと「グローバル文明と和〈やわらぎ〉の思想」でありました。

私はこの比較文明学会の初代の会長の伊東俊太郎先生と別の会合があって、たまたま昼食を隣で一緒にする機会があり、そこでお話ししている時に『日本発の「世界」思想』の話をする事になり、そこで「やわらぎの外交」というテーマがでているという話をしたら、伊東先生はとても驚かされて、ちょうどこの「比較文明学会」で「和〈やわらぎ〉の思想がテーマになった」ということを言われて、今度は私の方がびっくりしました。

その後、比較文明学会で行われた議論を詳しく承る機会をもちました。その中で宮嶋俊一北大大学院准教授（宗教学・死生をご研究）は、この学会に、以下のような示唆に富む会議資料を提出されておられます。

やわらぎとは思想の内実ではなく姿勢や態度のこと。自分とは異なる価値観や考え方を相手に押し付けるのではなく、かと言って、自分を捨てて相手に迎合するのではなく、違いを認め合いながら話し合いを重ねていくような、そういう姿勢・態度をいう。

しかし、話し合いが通用しない相手に対して宮嶋先生は、仏文学者の渡辺一夫先生の以下の考察を引用しておられます。

過去の歴史を見ても、我々の周囲に展開される現実を眺めて、寛容が自らを守るために、不寛容を打倒すると称して不寛容になった実例をしばしば見出すことができる……僕の結論は、極めて単純である。寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容たるべきでない。

自分は寛容であることが必須だと考える。不寛容はよくない。そこに、不寛容な相手に対して、どういう立場をとるべきかという難しい大問題が生じます。不寛容な相手に対して、寛容であるという自分の立場を守るために、不寛容になる、結果として自らが不寛容になる、それはよくないことだと、渡辺先生は言われたわけですね。

とても深い思想だと思います。しかし、本当にそれができるのか、ということは大問題です。でも、日本の学会の中で、「やわらぎ」の意味についてこういう議論が行われている、しかも私たちがこれまで京都で議論していたこととは全く切り離された空間で行われてきたということは、考えさせることだと思います。

## 結語

### やわらぎの外交序説

というところで最後の結論に移りたいと思います。

いま申し上げたように「やわらぎの外交」とは疑いなくこの本を議論し



てきた日本人、日本という場からでてきたものです。

そして私の全く知らなかった比較文明学会という場でも「やわらぎ」というアプローチが同時並行的に出てきていました。

そこで、自分の言っていることだけで正しいと言い切ることの良いのか、という思想の流れには、看過できない流れがあるように思います。

アメリカの中でも“China is not an enemy”ということを書かれた先生方をはじめ、こういう点を強調する方もおられる。

ただ、「やわらぐ」という精神的・知的態度が外交の中で所をえるには、日本においても世界においても、「何のために戦うのか」についての腹が決まらねば、その戦い方が「やわらぐ」かということの答えは本来出てこない。

自分自身が何に命を懸けて戦うのかという結論と「やわらぐ」ということはセットで考えなくてはいけないと思うのです。

自分にとって命をかけねばならない問題は何か、そして、そういう問題が否応なく「やわらぎの場」の上にあることの自覚がどこまで我々を変えていけるのか、大きな問題であるように思えます。

### 東郷茂徳と「51対49」

以上の問題について最後に、私が個人的に直面してきた体験として、東郷茂徳についての話をさせていただければと存じます。

東郷茂徳は第二次世界大戦のときの開戦と終戦の外務大臣でした。開戦の時は東条英機内閣の外務大臣として、とにかく戦争をしないということのために全力を尽くしたけれども成功しなかった。終戦のときは鈴木貫太郎内閣における終戦交渉の責任者になり、一週間から十日の痛恨の遅れが生じたにせよ、最終的には日本を8月15日の終戦に持ち込んだ人であり、私の祖父であります。

家庭的にはドイツ人のエディ・ドラランドという人と結婚し、娘が一人、私の母で東郷いせというんですが、母は、父親である東郷茂徳に非常に近い娘で、開戦の時も終戦の時もそのそばにいまして、祖父の考え方をたぶ

ん世の中で一番よく理解していた人の一人でした。

1997年ちょうど私がモスクワ大使館の次席公使から本省勤務に戻ってきたときに癌で亡くなりました。その死ぬ直前に二人だけで話す機会がありまして、その時に母から、

和ちゃん、おじいちゃまにとって外交で一番大事なことは何だったか知っている？

と聞かれました。

これは一瞬虚を突かれました。祖父はとにかく「頑張る」ということについては有名な人でしたから「頑張るということですか」と聞いたところ、

いや違うの。国が最終的な決断をするときに、自分の総理大臣に対して、ここは相手に51渡してこちらは49にしましょうということをはっきり言えるのは外交官しかいない。その勇気をもてるかが、一番大事なことなの。

これには驚きました。それからしばらく母と話をしました。要するにこういうことだと理解しました。

外交官は、交渉の前半、徹底的に頑張る、こちらの意見を言う、しかし、自分の意見を言うということは相手の意見を聞くということと同じ。自分の意見だけを言うけれども相手の意見を聞かないという外交官はいないわけで、徹底的に意見をいうことによって、だんだん相手の意見を理解するようになる。

そこで最後にものを決める時に、自分の国だけではなく相手国の立場にもたって、総理大臣にむかって、ここは51を譲ることによって一番良い結果が出ますということをはっきり言えるのは外交官だということになる。

その勇気をもって献策することが、結局、両国関係のため、世界のためが一番良い結果を生むということではないか。

誠に虚を突かれた思いでした。しかも数日後に母が死んだので、ある意味で、祖父、そして母の私に対する遺言のように聞こえてきて、その後のロシアとの交渉での一番重要な部分においても、このことは常に思い出すところとなりました。

外務省をやめてからあとも、もちろん自分は交渉をやる立場ではなくなりましたが、例えば、日韓関係について話が出るときには、どこかで誰かが総理に「ここはもうやめた方がいいです」と言わなくてはいけないという風に思うこともあります。

私にとって、消すことのできない「やわらぎの外交」の経験となりました。

### 学生のみなさんへ

終わりに学生のみなさんに三点申し上げたいと思います。

今日の話の中に出てきたことですが、一つは、人間関係の大切さです。皆さん、スマホをやるではないですか。スマホは人間関係そのものではない。でもスマホを通じてつくる人間関係はいかに大切かということをいろんな方がおっしゃっている。そうかなと思います。

でも私が言うのは、生きた人間のことです。私もこの生きた人間のネットワークのおかげでここまで来られたとしみじみ思います。「一期一会」といいますが、やはり皆さんの友達、家族、それからこれまでの人生で会われたいろんな人、大切にしていだければと思います。

二番目に、夢をもってほしい。私の夢は哲学でした。それを学んだことによってなんらかの力をいただいた。けれども、後悔はその夢を毎日30分、毎日15分追及してこなかったことです。後悔と言えば私の最大の後悔です。みなさんには、そういうことにならないように。自分の夢はこれだというものを見つけて、一生それを追及していただきたいと思います。

三番目に、今日の話の中心ですけれども、結局、主張すること、戦うこと、それとセットで、そこから和らぐということ。私は皆さんに、戦ってほしいと思います。自分の人生にとって大事なことのために戦ってほしい

と思います。しかしその戦いの中で、ただ相手をやっつけて倒せばよいというものではない。全力をもって戦うだけに、その中で生まれるやわらぎ、相手に対する思いやりを生かすという謙虚さを身に着けていただければと思います。

## 質疑応答

以上少し時間を超過しましたが、質疑の時間が後7分残りました。どなたからでもご自由にご質問ください。

卒業生1：私はロシア語を使って研究を続けているものですが、ロシア語で、プーチン大統領に「やわらぎの外交」を説明しようとしたら、どういう言葉で説明しますか。

答え：辞書でチェックはしていませんが、ロシア語には、“moderatsiya”という言葉があります。英語で“moderation”と言っている以上、たぶんこの言葉でよいのではないのでしょうか。ちなみに、ボーゲル先生は、“harmonization”「調和化」と“moderation”との違いを強調しておられました。ロシア語にも「調和化」を指す言葉として、“garmonizatsiya”という言葉があります。ですからこの区別は同様になりたつのではないのでしょうか。

学生2：2018年秋学期に東郷先生の自由演習をとっており、その時に、安倍・プーチンの間で北方領土問題が解決されるかもしれないというお話がありました。現在の見通しはいかがですか。またこれから対ロシアでプーチンに対して使えるカードは何ですか。

答え：2018年11月14日シンガポールでの安倍プーチン会談のあと、安倍総理は、「自分とプーチンとの間で、56年宣言を基礎に領土問題を解決することを合意した」という記者発表をされました。これまでの交渉の長い経緯を振り返ると、今の時点でプーチンが同意する可能

性があるのは、56年宣言のロシアによる解釈しかないのではないかと。ところがこれは、日本にとっては、国後・択捉の主権要求放棄というこれまでの領土要求の最も重要な主張をとりさげることになる、まさに、清水の舞台から飛び降りることになる。——というのが私の解釈でした。

さて、そこまで譲歩すれば、交渉は速やかに進むのではないかと想像されたのですが、2019年1年交渉は進んでいない。残念です。

私は、安倍総理とプーチン大統領が現職でいる間にこの問題は解決してほしいと思っています。安倍総理が「自分とプーチンとの間で、次の世代に残すことなく、この問題を最終的に解決することで一致した」というようなことを記者発表するということは、普通はないことと思います。ここまで積み上げてきたのかと思わせるものがあります。そこまで一致していたものが、このままスッと消えてしまったら、日口関係の求心力が消えるということで、それは両国のためにならない。それではどこで求心力が出せるかという、いまプーチンが言っているのは、彼にとって一番大事な問題は、ロシアにとっての安全保障問題だということです。

ロシアはいまあれだけ欧米からやられて、中国に引き寄せられているけれど、それだけでよいのかという課題はある。中国は中国で大切であり、日本としてそれにはなんの異議もないのですが、ロシアはロシアで、日本との関係でどこまで安全保障上良い関係を作れるかという問題をじっと見ているようにも見えます。

ところが私が非常に残念なのは、安全保障の根幹においてどの程度ロシアを使っていくことが日本の国益かという議論が全く日本の国内では行われていないことです。北方領土問題についてどういう解決策があるかということになると、皆大きな関心をもつだけでも、日本の国益のためにどういう風に安全保障上ロシアを使っていくのがよいかという戦略的な大問題についての議論が日本の国内で誰からも聞かえてこない。

安全保障についてロシアをどう使っていくかという本質論についてしっかり議論をしたうえで、ギリギリ日米安保条約を堅持しながら、なおかつロシアとどこまで接近できるかという議論をすれば、ロシア人の心を動かす部分があるにちがいないと私は思っています。

しかしこれを残る二年の間にできるのか、これはできるかできないか私にはわかりません。もう一つ、官邸及び外務省はそういう議論をやっているのかいないのか、ここもわかりません。

けれども、戦略的にロシアをどう使うかという議論をせずに、小手先だけで、INFがどうしたとか、迎撃ミサイルをどうするかということだけで、ロシアから公開外交でポンポンと球が飛んでくる、それにその場対応をするしかないなら、ロシアは動かないと思います。

そういう議論をせずにこのまま安倍プーチンの時代が終わってしまうとすれば、本当に残念です。流す涙も枯れてしまうような暗澹たる気持ちになります。

以上

『日本発の「世界」思想』～和<やわらぎ>の外交に向けて

1月15日配布資料

『日本発の「世界」思想』～和<やわらぎ>の外交に向けて

——京都産業大学で学んだ11年——

2020年1月15日（水）・東郷和彦

京産大以前 外務省時代 ロシア  
外国の大学で 国際関係論  
中国とアジア  
アイデンティティと文明

京都産業大学 最初は何を 北東アジアとアイデンティティ  
『日本発の「世界」思想』哲学・公共・外交  
無からの包摂 十牛図 別紙  
和<やわらぎ>の外交の誕生

やわらぎの外交序説

世界情勢の激変 米中対決  
現状維持国としての米国  
台頭する現状変更国としての中国  
地政学とデジタル革命下での覇権  
米中対立下での日本  
安倍外交（1）地政学的米中対立下での日本  
安倍外交（2）Mutual Decoupling 下での日本  
エズラ・ボージェルの助言  
ユヴァル・ハラリ思想  
再び日本へ：比較文明学会大会（2019年11月16日）  
「グローバル文明と和<やわらぎ>の思想」

結語 やわらぎの外交序説  
東郷茂徳と「51対49」  
学生の皆さんへ